

飼料用トウモロコシ新品種「ヒュウガコーン」について

向井 康・野崎国彦・高田康之・副島四郎

(宮崎県総合農業試験場・都城支場)

MUKAI, Y., NOZAKI, K., TAKADA, Y. and SOEJIMA, S.

A New Corn Cultivar "HYŪGAKŌN" for Forage.

トウモロコシの栽培において、F₁品種が合成品種より優れていることは述べるまでもないが、西南暖地においては採種生産性の低さにより、F₁品種の普及はのびていない。宮崎県総合農業試験場都城支場では採種のしやすさを目的とした合成品種の育成を昭和43年から進めてきた。

来 歴

この品種は8つの組合せ能力の高い母品種の遺伝質を均等にとりいれることをねらいとして、昭和43年に諸塚-3×GCB1(III)、上長川-1×WDC、安別当×千葉八街在来、神金-1×白石-1の単交配を行い、44年にそれらの複交配、45年に複々交配を行い、46年以降は隔離ほ場での自然交配により優良雌穂の選抜を行い育成した合成品種である。48年に宮崎1号の系統名が付され、各試験の結果、成績が良好であったので宮崎県で奨励品種に採用され、51年に「ヒュウガコーン」(農林合20号)として命名、登録された。

特性の概要

程は250cm位でWDCより長程で、着雌穂高も高く、茎も太い。雌穂径は6~7cm程度で、100粒重が40g程度の中粒である。粒色は黄色から橙色のものが多く、白色から赤橙色まで混在し、粒質はデントからフロントまで混在するが、セミデントが多い。熟期はWDCよりやや遅く、やや晩生のグループである。倒伏は長程であるがWDCより強く、交1号なみである。下葉の枯

上りは少なく、耐病性(すじ萎縮、ごま葉枯、すす紋病)は交1号なみであり強くはない。総収量、雌穂重、茎葉重ともにF₁品種なみの多収を示す。

栽培上の注意

やや晩生の品種であるので関東以北のサイレージ用としては晩生に過ぎ、また、暖地でも8月以降の播種では糊熟期に至らないことも予想される。多収穂のためにはなるべく早播きすることが望ましく、また、倒伏には特に強くはないので極端な多肥・密植栽培はさける方がよい。肥沃地や多肥栽培などの好条件のもとではF₁品種を栽培した方が有利と考えられ、ヒュウガコーンはWDCや大デッチなどの自然交配品種におきかえられることが望ましい。

採種上の注意

ヒュウガコーンは自然交配品種と同様に、自家採種が可能なが最大の特徴であり、子実収量は300kg程度がみこまれる。すなわち、他の品種から300m以上隔離されたほ場なら自然交配により採種できる。原々種および原種の採種では、隔離ほ場の周辺3列以上を除き、残りの各部分から一様に収穫し、特に不良な個体を除くほかは選抜を行わない方がよい。採種ほ場は5アール以上が必要で、広い程よい。採種をくり返しているうちに、もしも、種子がデントまたはフロントに偏するようになった場合は、種子を更新する必要があると考えられる。

第1表 ヒュウガコーンの特性(昭和48~51年の平均 都城支場)

品 種 名	初期生育	倒伏	絹糸抽出		稈長	着雌穂高	生 雌穂重	生総重	対標比	乾 雌穂重		TDN
			月 日	月 日						kg/a	kg/a	
ヒュウガコーン	ヤ良	少	7. 5	7. 27	246	128	172	615	111	kg/a 45	kg/a 130	kg/a 88
W D C	ヤ良	中~多	7. 3	7. 26	230	124	137	553	100	42	120	81
交 1 号	良	少	7. 3	7. 23	240	128	163	576	104	44	124	84
交 10 号	良	少	7. 4	7. 26	253	139	185	617	112	50	138	94